

名古屋大学

NUA
archives
nagoya university

大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第37号 2020. 3

目次

Contents

本室は「東海国立大学機構大学文書資料室」になります	2
平成30年度に大学文書資料室が受け入れた資料	3
ホームカミングデーで3つの企画をおこないました	4
フォーラム「地域資料保全のあり方を考える」を共催しました	5
お雇い医学教師ローレツ先生記念コンサート —オーストリアの古城で日澳交流— (名古屋大学名誉教授 加藤詔士)	6
資料室日誌 (抄)	9
名大史をつむぐ資料を本室に!	10



完成式典当日の豊田講堂 (名古屋タイムズアーカイブス委員会提供)

資料室だより①

○本室は「東海国立大学機構大学文書資料室」になります

名古屋大学大学文書資料室(以下、本室)は、令和2(2020)年4月1日から、「東海国立大学機構大学文書資料室」と改称することになりました。組織の位置づけも変わります。

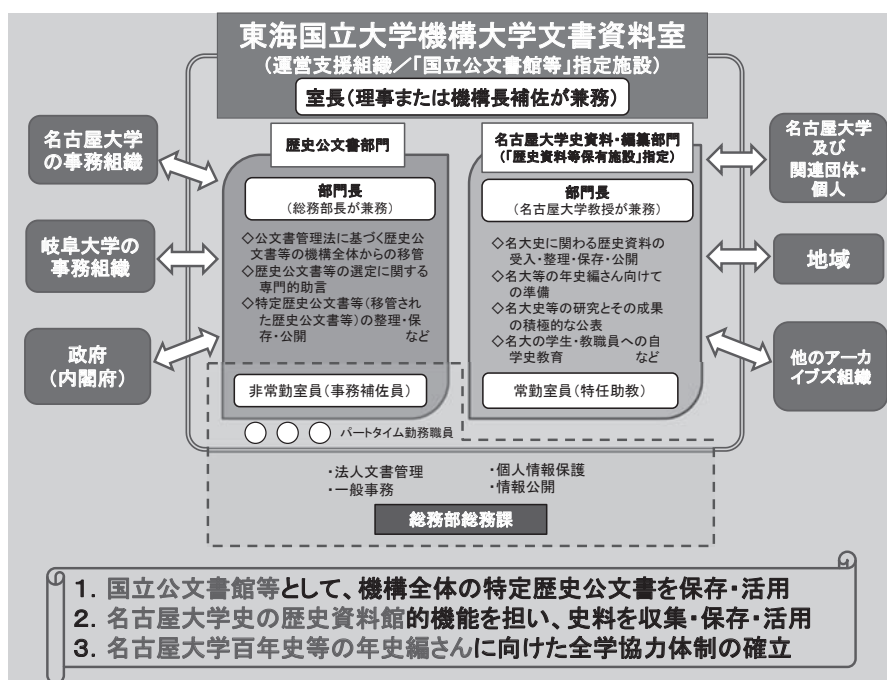
これは、同日から、名古屋大学と岐阜大学を運営する共通の法人として、国立大学法人東海国立大学機構(以下、機構)が設置されることに伴うものです。本室は、これまでは国立大学法人名古屋大学の本部直属の運営支援組織でしたが、これからは機構本部直属の運営支援組織になり、歴史公文書に関する業務としては岐阜大学についても担当するため、名称から「名古屋大学」がなくなります。

組織としては、まず室長は、これまでは名古屋大学の理事の兼務でしたが、機構の理事または機構長補佐が兼務します。その下に、これまでと同様に2部門を置きます。

歴史公文書部門はそのまま、部門長には機構本部の総務部長(これまでは名古屋大学の総務部長)が就任します。同部門は、機構本部及び名古屋大学・岐阜大学の法人文書について、歴史公文書に相当するものを選別し、選別された歴史公文書の移管を受け、保存措置を施したうえで一般公開を行う業務を担当します。つまり、名古屋大学と岐阜大学を含む機構全体の公文書館になります。

もう1つの部門は、これまでは歴史資料・大学史編纂部門でしたが、これが「名古屋大学史資料・編纂部門」になります。部門長は、これまでと同様に名古屋大学の教授が兼任します。ここは、法人文書以外の歴史資料を受け入れ、公開するとともに、大学史の編纂に携わる部門ですが、「名古屋大学」を冠していることから分かるように、岐阜大学の歴史資料や大学史編纂は原則として扱いません。これは、岐阜大学では、本室のような大学全体のアーカイブズ組織を置いていないためです。

ただし、書庫などの施設は、これまでの本室と全く同じです。室員以下の専任スタッフも、現在の本室の人員がそのまま移行します。これからも、本室へのご支援・ご指導のほど、どうかよろしくご厚意申し上げます。



資料室だより②

○平成30年度に大学文書資料室が受け入れた資料

大学文書資料室(以下、本室)では、平成30(2018)年度において、下記のとおり特定歴史公文書等454点(ファイル)、歴史資料等8,685点、合わせて9,139点の資料を受け入れ、もしくはオンライン資料検索システムにアップロードしました。

特定歴史公文書等とは、公文書管理法に基づき、主に名古屋大学(以下、本学)の組織から移管された法人文書です。30年度は、29年度の854点に比べると半分近くに減っています。これは、29年度は臨時的な移管が多かったからで、むしろ30年度が通常の数に近いといえます。

組織別では、事務局(本部)の研究協力部と教育推進部が29年度に比べてかなり多くなっていることが目につきます。研究協力部は、特許関係の文書が多く移管されたからです。今回、同部社会連携課と相談し、データベース化されていない時代の特許関係文書を全て移管することにしました。教育推進部は、グローバル30(G30)関係の移管文書が多くなっています。これは、G30の開始から10年が経過し、関係文書の保存期間が満了して本室に移管されるようになったためです。G30は、本学の最重要事業の一つであるため、移管基準では関係文書を全て移管すると定めていますが、移管数がかなり多くなるため、基準をもっと細かくした方がよいようです。

歴史資料等とは、これも公文書管理法に基づき、しかるべき管理が義務づけられている特定歴史公文書等以外の歴史資料を指します。下の表における「名古屋大学(本部)」及び「名古屋大学(部局)」は、本学が作成した刊行物・印刷物です。30年度は、「個人」が29年度以上に膨大な数に上っています。これらは、元教員(またはその遺族)の寄贈資料です。これらの多くは、正確には30年度に受け入れたものではありませんが、未整理であったものの整理が進捗し、検索システムにかなりの点数がアップロードされたことを示しています。

特定歴史公文書等

移管元(平成30年度末現在の名称)	点数
総務部	31
研究協力部	140
企画部	21
教育推進部	122
情報連携統括本部(情報推進部)	6
監査室	4
文系事務部	35
理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務部	21
医学部・医学系研究科事務部	27
工学部・工学研究科事務部	14
環境学研究科	5
研究所事務部	12
附属図書館事務部	16
合計	454

歴史資料等

提供・寄贈元	点数
名古屋大学(本部)	518
名古屋大学(部局)	1,624
名古屋大学関係団体等	59
アーカイブズ機関等	148
大学・研究機関等	21
個人	6,298
学外その他	17
合計	8,685

資料室だより③

○ホームカミングデーで3つの企画をおこないました

大学文書資料室（以下、本室）は、令和元(2019)年10月19日（土）に開催された第15回名古屋大学ホームカミングデーにおいて、①「名大創立80周年記念展 名古屋帝国大学の誕生」、②「スライドショー 写真で見るあの頃の名大」、③「東山キャンパス名大史ツアー」の3つの企画を行いました。

①は、令和元年が名古屋帝国大学（名帝大）創立から数えて80周年にあたることを記念するものです。名帝大の創立経緯と草創期のことをテーマとした「ちょっと名大史」（名大の月刊広報誌『名大トピックス』で連載）の記事を、20枚のパネルとして展示しました。

②は、昨年に引き続いての企画で、ホームカミングデーに特に招待される、卒業後50周年、40周年、30周年、20周年、10周年の卒業生向けに、それぞれ30枚ほどの在学期間の名大の写真のスライドショーとして上映するものです。昨年と重複する写真もありますが、半分は新しい写真と入れ替えました。限られた年代にしぼって、しかも様々な種類の写真をピックアップするのは手間がかかりますが、今年も好評をいただきました。

③も、昨年の好評を受けてのものです。キャンパス内の名大史を語る様々な記念物や建物等を、本室室員が説明を加えながら1時間程度で回りました。今年も定員をはるかに上回る事前予約の応募者があり、不安定な天気の中でしたが、25名が参加しました。

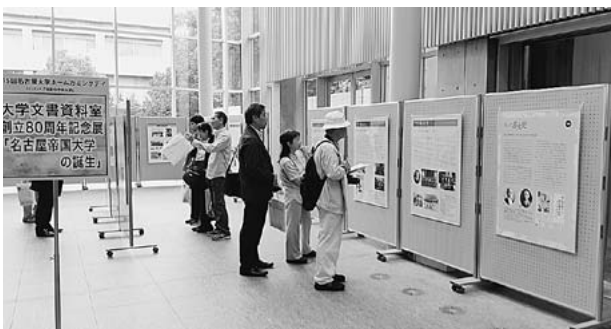
そのほか、ホームカミングデーのためだけの企画ではありませんが、以前に本室が編集した小冊子を増補改訂して『名古屋大学80年の軌跡—歴代総長と名大史—』（発行は名古屋大学）として印刷し、招待卒業生や高額寄附者でホームカミングデーに出席した方々に贈呈しました。



スライドショーの様子



スライドショーで上映した1985年のクラス写真



創立80周年記念展の様子



キャンパスツアーの様子（経済学部中庭「キタン庭園」）

資料室だより④

○地域歴史文化大学フォーラム

「地域資料保全のあり方を考える」を共催しました

令和元(2019)年12月22日、名古屋大学（以下、本学）において、地域歴史文化大学フォーラム「地域資料保全のあり方を考える」が開催されました。本学大学院人文学研究科と大学共同利用機関法人間文化研究機構が主催するものですが、大学文書資料室（以下、本室）も共催団体として名を連ねました。

このフォーラムは、「東海資料ネット」の設立に向けて行われたものです。資料ネット（史料ネット）とは、自然災害に遭って損傷した歴史文化資料を所蔵元から救出し、応急措置及び後には本格的な修復・保存措置などを講じて、地域の歴史文化資料の保存と継承に寄与しようとする団体です。大学関係者が先導的な役割を果たしつつも、同時に地域の行政や博物館等と密接に連携し、市民の皆さんの支援を得ながら活動する、ボランティア組織であることを基本としています。すでに、日本全国で26団体が組織されました。

東海地域は、南海トラフ巨大地震で激甚な災害が確実視されており、異常気象による大水害の危険性も例外とは言えません。そこで、本学などの東海地域の大学関係者が中心となり、資料ネットの設立に向けて活動を始めました。本室は、東海地域の歴史文化資料でもある名大史資料の保存施設であるとともに、地域貢献も重視する本学の組織であることから、このフォーラムを共催することになりました。また、本室の堀田慎一郎室員は、東海資料ネットの設立発起人の1人になっています。

午前の第1部では、国立歴史民俗博物館の天野真志氏を講師に、ワークショップ「資料の緊急対応を考える」を行いました。これは、歴史文化資料に模した紙をわざと水損させたものを用い、その応急措置の方法を学ぶものです。参加者は30名ですが、これは事前予約制でその人数に限ったものです。

午後の第2部は、シンポジウム「歴史文化の保存・継承と防災対策—東海資料ネットの設立に向けて—」です。東海地域で歴史文化資料の保全や継承に携わっている方々や、他の地域で資料ネット活動の中心になっている方々による報告・コメントの後、それらの7名をパネリストとするディスカッションを行いました。158名もの参加者があり、テレビでも報道されました。

その後、令和2年2月16日に本学で設立総会が行われ、東海資料ネット(正式名称は東海歴史資料保全ネットワーク)が正式に発足しました。応急措置には専門的な技術は必要ありません。ご関心のある方は、ぜひ tokaishiryonet@gmail.com までご連絡ください。



シンポジウムの様子



ワークショップの様子

お雇い医学教師ローレツ先生記念コンサート — オーストリアの古城で日澳交流 —

名古屋大学名誉教授 加藤 詔士

1. 日澳修好150周年記念事業

オーストリアと日本が外交関係を樹立したのは明治2(1869)年10月。それから150年目にあたる昨(2019)年、記念の催しが両国で盛んに開かれた。

「ローレツ博士をしのび、日澳修好150周年を記念する—夏のお城での日本コンサート」もその一環である。お雇いオーストリア人教師 A. ローレツ (Albrecht von Roretz, 1846–1884) をしのび、日澳の親睦と交流の進展を願った催しであり、在オーストリア日本国大使館の認定を受けた記念事業として、オーストリアのホルン市で開かれた。

このコンサートに注目する理由は、第一に、ローレツは名古屋大学の元教師であったことである。名古屋大学医学部と同附属病院の前身である公立医学講習場ならびに公立病院に、明治9(1876)年5月に着任。西洋の近代医学を伝えたお雇い教師である。外国人教師としては、ドイツ系アメリカ人医学教師 T. H. ヨングハンス (T. H. Yunghans) に次いで二人目であった。

第二に、お雇い教師をしのぶコンサートがその母国で開催されたこと、しかもその子孫が主催して開かれたことである。お雇い教師の母国もしくは郷里で、両国の関係者が集いその遺徳をしのぶ記念行事はいくつかみられるが、子孫が主催者となり、故郷のゆかりの地で開かれた催しとなると例少なく珍しい。

2. ホルン市の古城でコンサート

(一)

ローレツ先生記念コンサートは、令和1(2019)年6月29日、ローレツ家が所有するブライテンアイヒ (Breiteneich) 城で催された。天文10(1541)年に築かれた由緒ある城である。ウィーンの北西、チェコとの国境近くのホルン市にある。

主催者はローレツの子孫で城主のリッパート (Dr. Christian Lippert) 夫妻と4姉妹。令夫人がローレツの大姪にあたる。参加者は、ホスト側がローレツ家一族、近隣の城主、各国の大使など95名。日本側は在オ



現在のブライテンアイヒ城 (西川輝昭氏提供)

ーストリア日本国大使館の大使夫妻、領事、医官をはじめ、オーストリア在住の医学研究者や日本人ビジネスマンなど38名を数えた。名古屋大学医学部出身の方も含まれている。

コンサートは、夕暮れ時、城内のホールで始まった。メゾソプラノ日野妙果、バイオリン前田朋子、ピアノ山口友由美が出演。ベートーベンのピアノソナタ月光やバイオリンソナタ春をはじめ、シューベルトおよび R. シュトラウスの歌曲、からたちの花・浜辺の歌・さくら横ちょうといった日本の童謡や歌曲などが奏でられ歌われた。城内ロビーと庭園でのカクテルパーティーでは、ローレツの足跡、両国の親善の歴史などをめぐって会話がはずみ、親睦が深められた。

招待状にはローレツについての紹介文が添えられた。コンサートのオルガナイザーでウィーン在住の茶野節子氏夫妻によって作成されたもので、名古屋、金沢、山形におけるお雇い教師活動やローレツゆかりの記念物と記念事業について、興味に富んだ紹介がなされている。オーストリアではあまり知られていないローレツ像があざやかに蘇った感がある。

筆者は出席できなかったが、小著『ローレツ先生物語』(1997)、『名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生—』(2002)などを贈り、名古屋時代のローレツについて紹介した。

(二)

このローレツ先生記念コンサートの開催には、大きな意味が認められる。

第一は、日澳の文化交流、それもお雇い教師を介した交流であることである。お雇い教師は日本教育の近代化と自立化に寄与しただけでなく、その国際化にも貢献した。日本体験と日本事物を持ち帰ったうえに、帰国後も日本との関係と交流を推進したからである。ローレツの場合、帰国後、ウィーンのヒンメル(Himmel)サナトリウムの病院長に就任したが、2年後の明治17(1884)年7月、37才で早世したため、自身で日本との交流の進展に寄与することはできなかった。けれども、彼をしのぶ記念コンサートが開かれたことで、両国の人びとが親しく集い親睦と交流が深められることになったことの意義は大きい。

第二に、コンサートの開催を機に、母国オーストリアにおけるローレツ関連の史跡や文書の調査研究が進んだことである。ローレツの遺書、死因、死亡日時、墓地の移転、ローレツ家所有の城などにかかわる調査であって、これは茶野節子氏やホルン市の元郷土博物館館長でローレツ研究者のE. ラブル(Eric Rabl)博士などによる、たゆむことない献身的な努力の賜物である。この調査研究はローレツ家の支援を受けているので、さらに進展するにちがいない。



中世のブライテンアイヒ城 (茶野節子氏提供)

3. 名古屋大学のローレツ先生

(一)

ローレツはお雇い教師といっても、招聘されて来日した訳ではない。実は、博物学への強い関心に駆られ、東アジアでの調査研究を意図してやって来た。伯父のオーストリア・ハンガリー帝国弁理公使I. R. シ

ェツファー(Ignaz Ritter von Schaeffer)に随行し、オーストリア帝国公使館付医官という肩書でやって来たのだ。明治7(1874)年11月、28才のときのことである。

明治7年という、その前年にウィーン万国博覧会が開かれている。日本政府がはじめて公式に参加し、日本の美術工芸品や名古屋城の金鯢などの展示がヨーロッパのジャポニズムを刺激したことで知られる博覧会であるが、ローレツもこの万国博で日本探訪心を刺激されたにちがいない。来日した翌年の3月から4カ月間、さっそく西日本各地の調査旅行を敢行した。好奇心旺盛な旅行であって、その成果は「日本南部旅行報告」(1875-76)という紀行文にまとめられている。

その後、横浜居留地に戻り医院を開業していたとき、お雇い教師の口がかかった。最初は愛知県からであり、同県の公立医学講習場および公立病院に着任した。

(二)

愛知県お雇い教師の期間は、明治9(1876)年5月から13(1880)年4月までの4年間である。この名古屋時代について特筆すべきことがある。

第一に、病院での診療とともに、医学講習場で外科通論、婦人病論、皮膚病論、梅毒病論、産科学、断訟医学(法医学)、内科臨床講義、外科臨床講義を担当。ウィーン大学医学部で修得した、当時の最新医学であった新ウィーン派医学の普及につとめた。月刊の学術雑誌『医事新報』の創刊・編集についても指導し、ローレツの臨床治療や講義の報告記事のほか、海外の新薬の紹介や医学雑誌の訳も掲載された。医学教育と病院の体制づくりについて先導したことも特筆される。3年制カリキュラムと試験によるクラス編成、教員の専門分担の明瞭化、疾患別・重症別の患者分類、カルテの分類整理、医師の勤務ローテーションの編成などである。これらのことは、田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』(1995)に詳述されている。

第二に、県や国の公衆衛生行政についても建議・提言している。コレラが流行するなか、環境衛生の浄化の立場から汚水排導法を建議したり、市民に対して日常的に公衆衛生の指導と取締をする健康警察医官を設置する提言をしたりした。精神病患者を一般患者なみに保護・収容し、これに治療を加えて社会復帰させることを説き、癲狂室を設立することも建議した。院内には、患者擁護の配慮がなされた、ヨーロッパ式の癲狂室が設けられた。

第三に、日本人医学徒に対する医学教育においては、「自分はあくまでお雇い教師である。契約した年



ローレツと後藤新平
(1880年、名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵)

限をつとめ、約束の報酬をえて帰国すればそれでよいが、自分としては、良医を養成して将来の公益をはかりたい一念である」という姿勢で臨んだ。とくに青年医師・後藤新平に嘱望し、自分の子どもを愛するように薫陶したことが知られている。ローレツの衛生行政思想は、後藤のその後の人生に大きな影響を与えたことが特筆される。

第四に、博物学の調査研究については、休暇を利用して各地を探訪し、調査と採集につとめた。「日本における樟腦の製造」「日本の漆器」「日本における鳥の飼育上の諸問題」という論文をまとめ、母国の新聞・雑誌に寄稿した。動物標本の採集者としても知られている。マボヤヤカネコトタテグモの学名には、ローレツという名前が含まれている。前者の学名は *Halocynthia roretzi*、後者は *Antrodiaetus roretzi* なのである。採集した動物標本は当時のウイーン王室博物館に送られた。その標本群はウイーン自然史博物館に引き継がれ、約360種、1450個体以上から構成されていることは、西川輝昭の論文「アルブレヒト・フォン・ローレツが日本で採集した動物標本のリストーウイーン自然史博物館のカタログ調査から」(2001)などに詳しい。

第五は、日本文化への傾倒についてである。茶の湯、生け花を嗜み、香道を蜂谷宗意に、刀剣の鑑定法を尾崎忠景に学んだ。古美術品の収集も趣味とした。その都度、地元紙『愛知新聞』『愛岐新聞』に取りあげられている。

ローレツは、愛知県をお雇い解除になると、金沢の医学校、山形の済生館医学寮にも招かれた。地方医学の発展に力をつくし、地方におけるドイツ医学導入

の基礎をつくった。帰国直前の明治15(1882)年8月7日付で勲五等双光旭日章が叙勲されたのも、このような功勞に対してであった。

4. 日本のローレツ先生顕彰事業

日本では、日澳修好150周年にちなんだローレツ関連の事業はみられなかった。けれども、これまで彼の功勞を顕彰する取り組みはとくに山形と名古屋で進展をみている。

山形では、ロータリークラブなどの先導で、ローレツの郷里への訪問と交流、没後100年にちなんだ日本・オーストリア共同研究とその成果をまとめた記念誌の刊行、ホルン市のローレツ家墓地にある墓碑からとったローレツの横顔レリーフの制作。そのブロンズレリーフ顕彰碑の建立がみられる。そのほか、山形市立病院済生館の中庭には地元の商店街から寄贈されたローレツの全身像があり、山形市郷土館には遺品が常設展示されている。

名古屋では、ローレツが在任中に描かせた絵画『明治初年愛知県公立病院外科手術の図』(名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵)をもとに大型の陶板の記念碑が制作され、天王崎(名古屋市中区大須一丁目)の洲崎神社北側、かつてかれが勤めた医学校前の堀川河岸に建立された。ローレツが後藤新平、司馬凌海、早川養順ら5名の日本人医学徒に外科手術の実地指導をしている様が、浮世絵手法で描かれている。特定非営利活動法人「名古屋外科支援機構」からの建設寄附によるものであり、平成19(2007)年10月9日に完成式典がとりおこなわれた。

この絵画や陶板は、昨春、名古屋で開かれた日本医学会総会と日本医史学会総会・学術大会で、現代の医学・医療を開いた先哲の一人として、また名古屋医跡の一つとして展示・紹介された。名古屋大学附属図書館医学部分館におけるミニ展覧会「後藤新平－名古屋活躍編」でも、ローレツの医学教育と医療活動の成果の翻訳書や、ローレツと後藤新平の水魚のような交わりを伝える資料が展示され、関心を呼んだ。

その後藤新平やローレツを顕彰する歴史ウォーク「衛生のみち」も、特定非営利活動法人「市民まちづくり風の会」の主催、名古屋大学医学部の後援、塩野谷恵彦名誉教授の監修で始められ、毎年、盛大におこなわれている。ローレツが指導した医学講習場や病院跡、後藤新平の住居跡、司馬凌海の顕彰碑などをたどったり、前記の陶板については、道路からだけでなく堀川を渡る屋形船の船上からも眺めたりして、名古屋の近代医学の立役者の遺徳がしのばれている。

お雇い医学教師ローレツは、両国で今も生きている。

資料室日誌（抄） 平成31（2019）年2月～令和2（2020）年1月

- 2月20日 大学文書資料室室会議を開催（構成メンバー：上月室長、吉川部門長、木下部門長〔4月以降は宮川部門長〕、大桑係長、堀田室員、佐分室員〔4月以降は古賀室員〕（以降3/20、4/17、6/19、9/18、11/20、1/15にも開催）。
- 2月21日 事務補佐員候補者（一般公募）面接。
- 2月25日 役員懇談会で名古屋大学創立80周年記念史（以下、80年史）について経過報告。
- 2月26日～3月5日 特定歴史公文書等のくん蒸（業者のくん蒸車による）。
- 3月5日 部局長会で80年史について経過報告。
- 3月5日 「スライドショー 写真で見るあの頃の名大」を資料室のホームページで公開。
- 3月19日 80年史執筆打合せ会（以降、5/24、7/23、11/25、1/16にも開催）。
- 3月29日 『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第36号、『名古屋大学大学文書資料室紀要』第27号を刊行。
- 3月31日 木下部門長（総務部長）が退任。佐分室員、蒲生英博・伊藤乃玄・加藤真生の各事務補佐員が退職。
- 4月1日 宮川部門長（総務部長）、古賀室員が着任。
- 4月3日 林喜子事務補佐員が着任。
- 4月3日 新規採用職員研修で堀田室員が名古屋大学の歴史について講義。
- 4月16日 全学教育科目（全学教養科目）「名大の歴史をたどる」を開講（春学期）。
- 5月9日 事務補佐員候補者（一般公募）面接。
- 5月20日 東洋学園大学東洋学園史料室の永藤欣久次長が大学文書資料室を視察。
- 6月3日 魚住奈都子事務補佐員が着任。
- 6月7日 全国公文書館長会議及び実務担当者情報交換会に堀田室員が出席（東京）。
- 6月7日 「情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修会」に古賀室員と魚住事務補佐員が出席（名古屋）。
- 6月15日 堀田室員がキタン会定時総会で記念講演。
- 6月18日 全学教育科目「名大の歴史をたどる」で松尾清一総長が講義。
- 6月20日 「平成30年度に作成された印刷物の提供について」の依頼を全学に通知（担当：古賀室員）。
- 7月8日 「平成30年度の国立公文書館等における特定歴史公文書等の保存及び利用の状況報告」を内閣府大臣官房公文書管理課に提出。
- 7月9日 古賀室員と魚住事務補佐員が国立公文書館「公文書管理研修Ⅰ」受講（大阪）。
- 8月13・14日 全学一斉休業日のため閉室。
- 9月30日 小冊子『名古屋大学80年の軌跡―歴代総長と名大史―』刊行。
- 10月3日 堀田室員がパートタイム勤務職員研修で講義（11/21にも講義）。
- 古賀室員、魚住事務補佐員がパートタイム職員研修を受講。
- 10月7日 全学教育科目（全学教養科目）「アーカイブズ学入門―文書史料の世界をあるく―」を開講（秋学期）。
- 10月8日 古賀室員が「情報公開・個人情報保護及び法人文書管理に関する教育研修会」（名古屋大学）に参加。
- 10月9日 堀田室員が金沢大学資料館30周年記念講演会で講演（金沢大学）。
- 10月17日 法人統合後の法人文書の移管等について、岐阜大学の担当者と打合せ。
- 10月19日 ホームカミングデーで、3つの企画を開催（本ニュース4頁参照、当日要員：堀田室員、古賀室員、魚住事務補佐員、林事務補佐員）。
- 10月25日 法人統合後の法人文書の移管等について法規係と打合せ。
- 11月27日 東海国立大学機構設立準備会議に、法人文書管理体制案を附議し、承認された。
- 12月22日 地域歴史文化大学フォーラムを共催。
- 〔法人文書移管〕博物館（7/2）、監査室（7/5）、情報推進部情報推進課（7/8）、研究所事務部（7/12）、医学系研究科医事課（7/12）、生命農学研究科（7/26）、理学研究科・多元数理科学研究科（7/29）、総務部総務課（8/7）、教育推進部教育企画課（8/8）、研究協力部（8/21）、医学系研究科総務課（9/4）、総合保健体育科学センター（9/4）、文系事務部総務課（9/26）、教育学部附属学校（10/1）、工学研究科総務課（10/2）、附属図書館情報サービス課（10/2、10/4）、同情報管理課（10/3）、同東山地区図書課（10/3、10/9、10/31）、財務部財務課（10/7）、DO室（10/28）、企画部企画課（10/30）、施設管理部環境安全支援課（11/12）、総務部職員課（11/26）、教育推進部学生交流課（12/4）

名古屋大学の卒業生、現役・退職後の教職員の方々へ

名大史をつむぐ資料を本室に！

その他、ご処分予定の資料についても、まずはご一報ください

- ☆在学時の配布物
(学生便覧、シラバス、試験問題
課外活動の資料…)
- ☆教育・研究活動、大学・部局運営に
関する資料
(各種書類、会議のメモ、備忘録、
スクラップ記事…)
- ☆校費による印刷物・刊行物
(冊子、パンフレット、ポスター…)
- ☆ご退職関係の記念冊子・記念
論集・業績集… など



大学文書資料室の資料書庫

※ご寄贈資料は、名古屋大学大学文書資料室利用等規程などに基づいて、大切に保存・管理・活用させていただきます。とりわけ資料の公開につきましては、寄贈者の意向を優先しつつ、深甚の配慮をいたします。

【連絡先】 名古屋大学大学文書資料室
(下記参照)

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第37号
Nagoya University Archives News No. 37

名古屋大学大学文書資料室

室長 上月 正博 (理事・事務局長)
部門長 吉川 卓治
(歴史資料・大学史編集部門、
教育発達科学研究科教授)
部門長 宮川 勉
(歴史公文書部門、総務部長)
室員 堀田 慎一郎 (特任助教・専任)
室員 古賀 恭代
係長 大桑 康史
(総務部総務課内部統制推進室法規係)
事務員 河合 成典
魚住 奈都子

発行日 2020年3月31日
編集発行 名古屋大学大学文書資料室
名古屋市中区千種区不老町〒464-8601
電話：(052) 789-2046
FAX：(052) 788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷 株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38